

小藤文次郎先生 生誕の地の記念碑除幕

諏訪兼位 (名古屋大学 日本学術会議14期会員)

Kanenori SUWA



第1図 1988. 7.16 撮影



第2図 1988. 7.16 撮影

の町民の方々の力添えは大きかった。

7月16日(土)は先ず上新丁の現場で 記念碑の除幕が 小藤 甫氏と三浦平治郎町長の御兩名の手によって行われた。

除幕式典は場所を移し ホテルサンルート津和野において開かれた。中島教育長の詳細な経過報告のあと三浦町長から貝森義典氏に感謝状が贈られ 三浦町長の丁寧な挨拶にひきつづき 永田秀夫町議会議長 村上允英別府大学教授 諏訪などによって祝辞が述べられ 最後に小藤 甫氏の挨拶があって閉じた。除幕式は 津和野町議会議員 教育委員会関係 町役場関係者など約50名の参列のもと おごそかに進められた。

ひきつづいて祝宴が同上ホテルで開かれた。まず 亀井節夫京大教授の乾杯の首頭で一同津和野の地酒を飲み なごやかな祝宴に移った。除幕式と祝宴を通じ 小藤文次郎先生を偲ぶよき一日となった。参列者一同に 小藤家から高岡の花瓶銅器と紅白の和菓子が贈られ 津和野町からも津和野特産和紙木目込人形が贈られた。

なお 記念碑の石材の原産地の特定については 村上允英教授の御教示に負うところが大きい。また 地元の島根大学からも島田昱郎教授が参列される予定であったが 前日(7月15日)の浜田地方の集中豪雨のため 山陰線が不通となり 参列不能となった。

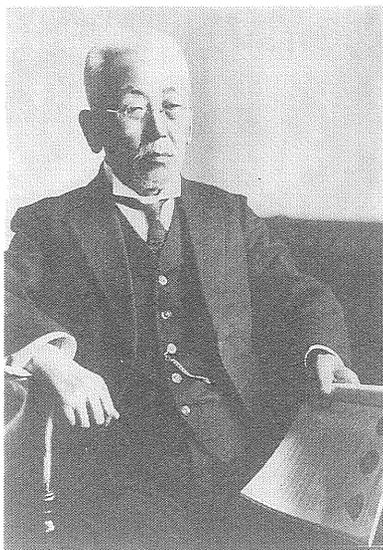
I. 除幕式

島根県鹿足郡津和野町上新丁の小藤文次郎先生(1856-1935)の生家跡に 小藤先生生誕の地の記念碑が新しく建立され 1988年7月16日(土)にその除幕式が行われた。記念碑の石質は花崗斑岩であり その原産地は山口県佐波郡徳地町引谷(山口市北東方)である。第1図に示すとおり 高さ約2m 横幅1.1~1.3m 厚さ20cmの立派なものである。碑銘は第1図・第2図に示すとおり和文および英文よりなり 諏訪が撰んだ。和文の揮毫は旧津和野藩主亀井家第15代当主亀井茲建氏の筆になる立派なものである。英文碑銘は第2図に示すように 横85cm 縦25cmの加工銅板に Bunjiro KOTO (1856-1935) The Pioneer and Professor of Geology in Japan was born here と刻まれている。記念碑の石材の調達 碑銘の彫刻など 建立の実務はすべて山口石材株式会社代表取締役の貝森義典氏によって進められた。

今回の記念碑の建立は 文次郎先生の嗣子小藤 甫氏(90歳 元愛媛大学工学部長)の熱意が津和野町当局を動かして実現したものである。津和野町の三浦平治郎町長 古橋 進元町長 中島 巖教育長の方々をはじめ 多く

II. 小藤文次郎先生

小藤文次郎先生は父の津和野藩士小藤治生^{はるふ}と母浪^{なみ}の間に 長男として安政3年(1856)3月4日出生した。藩校養老館において漢学や蘭学を学び 養老館長山口豪齋先生の推挙によって 明治3年(1870)9月貢進生として上京した。14歳の時であった。津和野藩士福羽美静



第3図 小藤文次郎先生

氏(のち子爵)の邸に書生して住み込み 大学南校をへて東京開成学校に入り 明治10年に東京大学が設立されると理学部の地質学科に編入され 明治12年(1879)7月に東京大学理学部の地質学科を第1期生として卒業した。地質学の勉強だけでなく和歌を詠み 穂積陳重・三宅恒徳とならんで東京大学三歌人の一人といわれた。小藤先生の歌には次のようなものがある。

早かれと心の胸にむちうてど行手つくせぬ
 文のやちまた
 咲き匂ふ花の梢の月影もおほろにかすむ
 春の夜半かな
 ほのほのと傾く月にきり立ちて
 鳴くかたわかぬかりかぬの声

東京大学卒業後 直ちに内務省地理局地質課(現在の地質調査所)に入り 石川県の手取川を調査した。明治13年(1880)10月ドイツに留学し チルケル教授に師事し ライプツヒ大学で学位を得て 明治17年(1884)4月に帰国し 直ちに東京大学講師になり 明治18年(1885)東京大学教授に就任した。以来大正10年(1921)まで実に36年間東京大学の地質学教授をつとめ 日本の地質学を代表する人物として 多くの学生や研究者を育成した。研究の面では日本の岩石学の基礎をきつぎ 明治24年(1891)の濃尾大地震の後は 震災予防調査会にあって全国の火山調査を指揮して活躍した。貪欲なまでに外国の知識を吸収し 日本に適用するために努力した。研究のスケールは大きく 地震や火山を地体構造に関連づけて追究した。

小藤先生が明治26年(1893)5月に創立した東京地質学会(昭和10年(1935)日本地質学会と改称)は当時50名足らずの会員で発足したが 95年を経て現在では5,000名の大きい学会に成長し発展している。現在 日本の地質学徒は小藤先生の孫弟子であり 曾孫弟子であり 玄孫弟子であるといつて 過言ではない。毎年 学会賞(日本地質学会賞, 日本地質学会論文賞, 小藤賞, 日本地質学会研究奨励賞など)に輝く研究者には 小藤先生の像を彫り込んだ立派なメダルが贈られる。

現在日本の地質学は 日本の地球科学の主流として 全地球的規模の研究を日夜倦むことなく続けている。そのたしかな源流のひとつは小藤文次郎先生である。

小藤先生は132年前に誕生された。その地に新しい記念碑が建立された。日本の地質学や地球科学はこれを機にさらに大きく脱皮し発展せねばならない。私は先生の碑の前に 改めてそんな思いにかられたのである。

最近中国で発見された新鉱床

岸本文男(地質相談所)

Fumio KISHIMOTO

江蘇省句容県で金・銀鉱床

中国有色金属工業総公司の華東地質勘探公司八〇七地質隊は 江蘇省句容県で銅 鉛 亜鉛の調査と探鉱を行い 一つの断裂構造帯付近での試錐を実施中に金・銀鉱体を発見した。その金の品位は最低2.8g/t 一般的には7g/tで 最高は22.20g/tである。銀の含有率は最低が37.20g/t 一般的には311g/t 最高が1,030g/tである。この一つの発見は 当該地区の探査に対して稼行価値のある金・銀鉱床が胚胎されているという展望を与えてくれた。

陳稀文(中国地質報 1986. 9. 29)

重慶のストロンチウム鉱 全国一

重慶地区のストロンチウム鉱物資源は 抜きでた全国一である。現在すでに探査・確認済みの稼行価値がある天青石と硫酸ストロンチウム鉱の埋蔵鉱量は 全国総埋蔵鉱量の90%以上を占めている。

ストロンチウムはレアメタルの一種で 蛍光管 信号弾 花火などの重要な材料であり 金属亜鉛の電解精製 顔料・パッキング材の製造 航空技術設備の分野などで 広い用途を持っている。

扈自存(中国地質報 1987. 6. 26)